

受洗までの栗津高明

－新島襄関係史料から探る人物像と入信の動機－

中 島 一 仁

I. はじめに

1868（慶応4）年に横浜でキリスト教プロテスタンティズムの洗礼を受けた栗津高明（1838-1880）は、海軍兵学校に勤めながら生徒らに伝道した軍人キリスト者として知られる¹⁾。加えて、日本における教会の英米宣教師からの独立を強く主張し、ついには自宅に無教派主義の日本公会を設立したことで、日本プロテスタント史上に独特の足跡を残した。

また、新島襄とのつながりの深さでも知られる。渡米中の新島が日本の家族に宛てた手紙は、栗津の手によって父民治^{たみじ}らに届けられた。1888（明治21）年、新島が所用で上京した際、すでに栗津はこの世を去っていたが、東京・麻布の栗津邸に長逗留している。

このように受洗後の栗津の歩みは比較的良好に知られているが、受洗までの前半生はほとんど解明されていないと言ってよい。従来言われていることは、わずかに1838（天保9）年に江戸に生まれた近江・膳所藩士であり、通称をケイジロウといったということ²⁾ぐらいである。

これは彼が藩士としてどのような役目についてどのような仕事をしたのかという人物像があいまいであることに他ならない。同時にそのことは、キリスト教禁制下に彼がなぜ受洗したのかの動機がはっきりしないことにもつながる問題である。

史料の制約から明らかにし得ることはごく限られてはいるが、これまで使われることがなかった材料を用いて、栗津高明の人物像と受洗の動機に少しでも迫ってみたい。

II. 人物像

まず、現在一般に流布している栗津の人物像を把握するため、辞典類のなかで平均的な記述がなされている『日本キリスト教歴史大事典』³⁾の「栗津高明」項のうち受洗までの部分を引用する。

あわづたかあき 栗津高明 1838. 5. 22 (天保 9. 4. 29)-80. 10. 29 日本公会創設者。江戸に生れる。初め桂二郎と称した。元近江膳所の藩士。1868 (明治 1) 年、バラ, J. H. から受洗。……

『キリスト教人名辞典』⁴⁾はこれに加え、「幕末脱藩して浪士となり各地に周遊する。横浜に来て J・C・ヘボン (ヘップバーン)、J・H・バラらについて英語を学び、さらにキリスト教も学ぶ」としている。他の主な辞典類⁵⁾もこれらの記述の域を出るものではない。

(1) 生まれ

これら辞典類の多くは、栗津の生年月日を「天保 9 (1838) 年 4 月 29 日」としている。これは恐らくは、注 1『日本基督新栄教会六十年史』(以下、『新栄教会六十年史』) 及びそれを引用した『植村正久と其の時代』2 の「五栗津高明」(222 頁) に「4 月 29 日」とあることに依拠したものであろう。しかし、1872 (明治 5) 年に栗津の私塾に入った門弟・和田秀豊は『福音新報』における記事⁶⁾で「天保九年閏四月廿八日」と異なった月日を証言している。実は、それは『植村正久と其の時代』2 の別の箇所引用されている(233 頁)。

栗津が海軍兵学校に勤務した関係で、現在、防衛省防衛研究所に栗津の関係史料が多く残されているが、その中に残る履歴史料に栗津の生まれに触れたものはない。また、『新栄教会六十年史』などは典拠を示していない。『福音新報』の記事は栗津の没後 25 年以上たった時点のものではあるが、栗津の存命中に和田が聞いたことを語ったものだと推測しうるし、確かに天保 9

年には閏4月があることを考え合わせると、却って信頼しうるとの見方も成り立つ。たかが1カ月の違いにこだわっても仕方がないかもしれぬが、通説に疑問を呈しておきたい。

(2) 中津藩との関係

これは従来語られなかったことであるが、栗津が10代のころ、豊前・中津藩とのつながりを持ち、幕末期の多くの武士と同じく砲術を習っていたことを確認することができる。佐久間象山の門人録に次の記述が見られるのである。

安政元寅正月砲術稽古出座帳抄録

(中略)

(「 」内朱筆)

(カギ形線部分朱筆)

「従是以下中津 島津君門人」中津

大西一郎次

(中略)

正月十四日

(略)

筑後守息 水野甲太郎

松代 小幡長右衛門

中津 安食銈次郎

膳所 久保田熊司

(後略)⁷⁾

ここに「栗津」の文字は見えないが、「中津 安食銈次郎」と書かれた人物が栗津その人であると推測しうる。

栗津が「安食」という姓も名乗っていたことは、注1『浜のとしび』に記されている。『新栄教会六十年史』や『植村正久と其の時代』にはそのような記載はなく、著者の井上氏が何をもとに書いたのか不明だが、後述のように『新島襄全集』収録の書簡には「安食改栗津銈次郎」と栗津自身の記した署名があり、安食が栗津の旧姓であったのは間違いのないところである。

この安食の名で、1854（安政元）年1月14日に象山が行った砲術稽古に松代や膳所などの藩士とともに参加者として記されている。「安食」も「銚次郎」もあまり一般的とは言えぬ姓と名であり、同姓同名の別人という可能性は低く、同一人物とみて差し支えないのではないかと考える⁸⁾。

「砲術稽古出座帳」という名称から分かるように、門人帳とは言っても特定日の砲術訓練に参加した者の名簿であり、恒常的な入塾者の名簿とは異なるものである⁹⁾。大西一郎次という中津藩士のところに朱でカギ形の印が付され、「従是以下中津 島津君門人」（朱字）とあるが、これは「大西以降、『中津』と記された者は島津君の門人である」という意味だと推測すれば、安食が「島津君」という人物の門人であったことが分かる¹⁰⁾。

「島津君」とは、中津藩の砲術家・島津文三郎のことだとみて間違いないとみられる。彼は「及門録」の冒頭にも登場し、西洋砲術導入のため佐久間を同藩の顧問に据えた島津良介の息子で、象山から「西洋三兵法術真伝免許状」を授けられたことで知られる人物である¹¹⁾。

中津藩は、老中阿部正弘が諸藩に海防の再強化を通達（御国恩海防令）した1849（嘉永2）年の翌3年7月、佐久間を軍制改革の顧問に据えた。藩主奥平昌服が佐久間を信奉しており、多数の藩士を入門させて砲術を習わせたのである。江戸の芝二本榎にあった藩の下屋敷では、しばしば佐久間を招いて稽古が行われた。

栗津が砲術訓練に参加した安政元年の翌年の記録ではあるが、江戸詰めの中津藩士・八条平次郎（半坡）が記した日記¹²⁾を見ると、当時、同藩が行った軍事訓練の様子が分かる。例えば、「御下屋敷ニ行。砲術足並ヲ見ヘシ」「御下屋敷ヘ行。銃隊足並ヲ見」「矢場ニ出、大砲込メ方ヲ見ル」「御下屋敷ヘ行。足並ヲ見ル。昼後ハ両刀ヲ帶シ藥ヲ発シ、六封礮ヲ加ヘ、大ニ面白シ」「大砲稽古見ル」などと記されている。栗津もこのような西洋砲術の訓練を受けていたのであろう。

（3）膳所藩との関係

膳所藩とはいつから関係が生じたのだろうか。新島襄関連の書簡と布施田哲也論文（注1参照）に翻刻されたJ・H・バラ（Ballagh）の書簡を使っ

て推測を加えてみたい。

(a) 慶応3年6月18日(1867年7月19日)付、新島襄宛て新島民治書簡

千八百六十七年三月二十九日合衆国マスサチユセツツ邦アントワ邑ノ大
学校より之書翰、慶応三年丁卯六月十七日本多主膳正様御藩安食鍵次郎
君より持参ニ而亜墨利人名不聞横浜ニ而五ケ年程世話ニ相成候仁より被
頼候趣を以、相達拝見いたし候、……¹³⁾

(b) 1867年7月12日付、横浜発、フェリス宛てバラ書簡

Your letter of April 16 th enclosing one from my friend in New Jersey, also
your letter to Mr. Brown of same date endorsing duplicate of letter of Credit
& a letter for the parents of Joseph Nee Shima reached 30th ult. I have for-
warded the letter to my friend Ajiki in Yedo requesting him to deliver it in
person and also to offer his services to bring me an answer to be forwarded
to America.¹⁴⁾

まず、(a) の書簡で、慶応3年6月までに「安食鍵次郎」が膳所藩(「本
多主膳正様御藩」)に仕官し、江戸にいたことがわかる。(b) の書簡でも、
J・M・フェリス(Ferris)からの手紙を横浜にいたバラが江戸の安食に
「forward(転送)」したとあるので、安食が1867年7月の時点で江戸にいた
ことがわかる。

膳所藩の藩士関係史料の残存状況がよくないことによるのであろうが、現
在のところ同藩の幕末期の分限帳類が入手できていないため、安食の役職や
禄高などは不明だ¹⁵⁾。ただ、安食が砲術を習い、バラから英学を学んでいた
ことを考え合わせると、一つの可能性として砲術や外国語の知識を買われ、
最幕末期になって膳所藩に新規に召し抱えられたと推測することもできるの
ではないだろうか。

(4) 受洗

不思議なことであるが、これまで栗津の正確な受洗日は明らかでなかった。『新栄教会六十年史』は慶応4年4月、『日本プロテスタント史研究』は単に明治元年、『浜のとしび』は1868年5月（慶応4年4月）などとしていただけだ¹⁶⁾。

次に掲げる1868年4月24日付フェリス宛てバラ書簡¹⁷⁾で、それが1868年4月5日（慶応4年3月13日）であること及びそのころの栗津の生活の様子やキリスト教に関する知識の程度が分かる。

今月の最初の安息日（5日）に、私の愛する教え子のうち二人に公開で洗礼を施した喜びを、お伝えしたいと思います。この時期に彼らを公開の信仰告白に導いた状況は注目すべきですし、彼らの試験の結果も信仰告白もまったく申し分のないものでした。一人は現在私と共に生活し、ローマ人への手紙を学び、家族の祈禱を日本語で行うことに、大きな喜びを見いだしています。この男は、江戸の英語学校の教師であった安食です。彼は、現在当地でアメリカ合衆国憲法の翻訳を行っており、それについての評論と宗教の自由に関する優れた論文を出版しようとしています。……

（中略）

今、もしその職があるなら、私は安食を私の日本人の生徒の英語教師、また安息日の説教者として採用したい、と思っています。本当に、日本で大きな仕事をするために、神がこの男を立ち上がらせたのだ、と感じているのです。……

この書簡から分かることを整理すると以下のようなろう。

(a) まず、栗津は1868年4月以前に「江戸の英語学校の教師」をし、米国憲法の翻訳をするまでに英語を習得している。「英語学校」とは、恐らくは膳所藩での役目に関連した教室か、栗津自身の開いた私塾であろうが、確かなことはわからない。米国憲法についての評論と宗教の自由に関する論文の執筆を企図しており、英文を読み、米国の政治・社会制度などにも通じて

いたとみられる。

(b) 栗津のキリスト教に関する知識は、(受洗の)試験の結果も抜群で、バラが説教者に採用したいと言うほどのものであった。信仰の厚さについても、禁教下に公開で信仰告白させてもいいほどのものであった。

(c) 栗津が、「家族の祈禱を日本語で行うことに、大きな喜びを見いだしてい」という点は、英米宣教師からの独立を訴えた後年の栗津を予告するもののようにも思える。あくまで栗津にとっては、日本語で行うことが重要であったのであろう。

(5) 洋学の学習

前項で触れた栗津の英学の学習について、もう少しみてみたい。

1872 (明治5) 年に栗津が文部省に提出した書類¹⁸⁾に、「私儀従文久二壬戌年於横浜合衆国教師バラ氏ブラオン氏タムソン氏ヘボン氏等ニ相従ひ英学修業仕」とある。1854 (安政元) 年に佐久間象山の元で砲術稽古をしてから8年が経過した1862 (文久2) 年から「英学修業」したと述べている。バラ、S・R・ブラウン (Brown)、D・タムソン (Thompson)、J・C・ヘボン (Hepburn) と4人の外国人宣教師の名前を挙げており、ある程度の期間、継続的に習ったことがうかがえる。この間、洋学の中心は蘭学から英学にかわった。栗津が蘭学をどの程度、どのように学んだのかは残念ながら手掛かりはない。

以下の事実をみると、当時の日本にあって彼の実力は相当の高いレベルにあったらしいことがうかがわれる。

栗津は1869 (明治2) 年、『英国尾栓銃練兵新式』という兵書を出版している¹⁹⁾。これは、イギリスで1867年に出版された歩兵操練の書である *Field Exercise and Evolution of Infantry* の完訳本である²⁰⁾。慶応になるころから日本へはイギリスの兵書がもたらされ多数出版されたが、栗津の出版した本は、後装式の銃(尾栓銃)に対応した編制や教練の方法を記述した当時としては最新の内容のものであった。1867年式のイギリス歩兵教練書は、翌年に福井藩の瓜生三寅(寅)と幕府官僚の橋爪貫一が抄訳本を出していたが、完訳版は栗津のものが初めてであった。明治初年、各藩の陸軍はイギリスの兵

式が標準になっており、栗津の翻訳書はかなり広く読まれたことであろう。

「江戸の英語学校の教師」をしていたという栗津だが、1868（慶応4）年2月に新島民治が裏に宛てた書簡²¹⁾に「本多主膳正様御家来安食桂次郎方江安中之小林達三郎五男二而勇五郎と申者同人方蘭学修業として罷越居候処」とあることから、このころ門弟をとっていたことが裏付けられる。書簡には「蘭学」とあるが、既に全国的に蘭学の時代は終わっており、実際には「英学」だったはずだ。

先に述べた文部省宛ての書類には「辛未年四月東京府江願之上開塾 御免許相成其以来別紙塾則之通英学生徒江授業仕候」とあり、栗津が1871（明治4）年4月から東京で英学塾を開いていたことがわかる。後述のようにこの時点ではすでに海軍に入っており、二足のわらじをはいていたわけである。この塾には、開塾の月に元尾張藩付家老の今尾藩知事・たけのこしまさもと竹腰正旧（のち男爵）が入学したことも確認できる²²⁾ほか、前掲の文部省宛て書類によると、塾生であった豊岡県士族には県が公費を支出して学ばせていたことも判明する。当時であって英語に熟達していたと思われる栗津の塾は、高い評判をとっていたのではないだろうか。

（6）脱藩と栗津改姓

仕官、受洗後の栗津の足取りを追う。

明治2年4月12日付の新島裏宛て書簡で新島民治は「一予も昨年十月東京江御供二而勤番罷在候付、差越候書状早速相達申候、返書之義も本多主膳正様御藩安食桂次郎殿も御家を出候趣二付、……²³⁾」と述べており、安食が膳所藩を脱藩したこと（「御家を出候趣」）が事実であるのが分かる。

さらに、さきに見たバラ書簡で、栗津が横浜でバラと同居し、以前に江戸の英語学校教師であった、とされていることから、書簡が出された1868年4月24日（慶応4年3月13日）の時点までに江戸を立ち去っていることが分かる。要するにこの時までには脱藩したことが推測される。

また、明治2年10月15日付の新島裏宛て書簡で、差出人の安食が「安食改栗津銈次郎」と署名していること²⁴⁾から、この日までに「栗津」に改姓したことも判明する²⁵⁾。この書簡の署名や『英国尾栓銃練兵新式』の著者名が

どちらも「銈次郎」と記されていることから、「ケイジロウ」の字もそれが正しいのではないかと考えられよう。

では、新たに名乗った「栗津」姓とは何であろうか。

第六大区二小区深川佐賀町壺丁目式番地

東京府貫属士族栗津利器弟

海軍兵学中教授 栗津高明

明治八年三月 三十六年十ヶ月

同人妻 寿子

明治八年三月 二十九年九ヶ月

右者今般第二大区六小区麻布仲ノ町十八番地江分家仕平民籍編入為仕度
候間此段奉願候也

明治八年三月 右 栗津利器[㊞]

戸長 富田美保[㊞]

東京府知事 大久保一翁殿²⁶⁾

1875（明治8）年に栗津が分家した際の東京府への願書である。ここで栗津は、栗津利器という者の弟とされている。

次に挙げる史料を見ると、この利器は、滋賀県から東京府へ貫属替えになり永世禄米4石8斗と賞典金22円68銭5厘を受ける元膳所藩士であったことが分かる。

（表紙）「明治九年六月以前東京府江貫属換及ヒ寄留地ニテ拝受ノ願聞届
候分 士族家禄賞典金禄調帳 滋賀県」

（中略）

旧膳所藩

永世家禄米四石八斗

当時

一金貳拾貳円六拾八銭五厘

東京府士族 飯田仁蔵

（中略）

同

同

一同上

同

栗津利器

以上から栗津高明は、膳所藩脱藩後に同藩士・栗津利器の養弟となり、安食姓を栗津姓に改めたものと推測できそうである。栗津の家は膳所藩上屋敷内の長屋にあったと推測される²⁷⁾。

(7) 海軍出仕

栗津が明治新政府に出仕したのは、1869（明治2）年であった。死去の際、海軍卿が祭染料（香典）の下賜を政府に求めた文書²⁸⁾に「一 明治二年十一月被任出納大令史／一 同三年二月被任土木大令史」という履歴が記されている。

出納大令史とは、国庫の金穀の出入りを担当した会計官（のち大蔵省）の役所である出納司の下級官吏。土木大令史は、営繕や治水を所管した民部官（のち民部省）の役所である土木司の官吏である。出納司は1868（明治元）年に横浜に支署が置かれている²⁹⁾。当時、栗津が横浜に住んでいたことを考えると、この支署に勤務していた可能性があるのではないかと思う³⁰⁾。

出納・土木両司勤務を経て海軍へ出仕したのは、次の人事史料³¹⁾から1870（明治3）年7月のことだと判明する。

栗津土木大令史

海軍操練所出仕申付候事

庚午七月

兵部省

別の史料³²⁾に「明治三庚午年兵部省の海軍操練所出仕被命候ニ付出京増上寺内天光院ニ仮寓罷在」とあり、「出京」と記していることから横浜に住んでいたときに命じられたのであろう³³⁾。

以後は海軍兵学寮の教官となり、中教授などの職に任じられて、将来の海軍将官に英学を中心とした授業を行い、日曜日に食堂に生徒を集めて聖書の講義などをしたのは既に知られている通りである。

Ⅲ. 受洗動機の推測

1869（明治2）年10月に栗津が米国の新島に宛てて出した書簡³⁴)は、栗津の受洗動機を推測させる内容を含んでいる。維新前後までの初期プロテスタント受洗者らが、自らキリスト教に関する自己の考えや思いを記した史料はほかにはなく、非常に貴重である。

……依而日夜希望、貴兄万々花旗国ニ在て志ヲ遂ケ、速ニ帰国し広く福音ヲ講し、暗塞之民心を開き、我民をして悔改、事神之大道を教諭し、我民の先覚タラン事ヲ禱祈ス ○近来我国江も支那訳之聖書多く渡り、読者も追々出来候得共、何分支那訳のミニ而は意味多明ニ解し難きより、左程民心ニ貫徹不致、彼是異論而已多く、耶穌教之徒ハ麁尽候方可然忤ト申ス説、紛興致居候 ○小子も先年中、江戸ニおゐて初学の輩を教導致し、毎日曜ニハ聖書を講し為聞候処、同地一変之際、横浜江再遊致し、一己之修行を主とし、同志之者と聖書を講し、傍ラ「バラ」氏之学校ニ而童輩を教導致し申候、然共 天父我全国を一変し、神子の名ニ依て、神恩を我民江下し賜の時至り候ハ、無疑事ニ候ヘハ、道ニ志ス者尽力せざるを得ざる時也、依而貴兄速に成業、帰国せざるを待つ ○当方英書を読候者多く出来候得共、道学の一事ニ至而ハ更ニ教導致候者無之、只支那訳之聖書ヲ綿密ニ読ミ候者ハ、却而仏家者流中ニ多く有之候、是ハ我道ヲ務むる為メニ無之、彼の説ヲ主張し聖書ヲ説破せんと欲する主意候ヘハ、何レ兩三年之内ニハ、種々之異論も紛興致し、少々之動揺ハ可有之候得共、恰も螻蛄之車輪ニ於るも拘シキ事ニて、却而我道の扶ケニ可相成と被存候……

ここから読み取れることを抽出すると以下のようなだろう。

(a) 啓蒙のためのキリスト教

新島に対して、日本でのキリスト教興隆のため速やかに帰国するよう求めたうえで、帰国後に「広く福音を講し、暗塞之民心を開き、我民をして悔

改、事神之大道を教諭」するよう望んでいる。日本人にキリスト教への信仰心を持たせるとともに、儒仏によって暗く塞がれた状態におかれている民心に光を当てたいと願っているようだ。キリスト教を日本の文明化の手段にしたいという思いが感じられる。

(b) 明治維新を神による行いと理解

「天父我全国を一変し、神子の名ニ依て、神恩を我民江下し賜の時至り候ハ、無疑事ニ候へハ、道ニ志ス者尽力せざるを得ざる時也」の部分からは、明治維新をキリスト教の神による日本人への賜物と表現し、その教えを信ずる者こそが維新、つまりは文明開化のために尽くすべきときであると新島に呼びかけているといえるのではないだろうか。

以上2点をまとめれば、栗津の心中には「神の業で実現した明治維新を絶好の機会として、キリスト教で日本を文明化の道に乗せたい」という強い信念が出来上がっていたように思われる。彼自身が受洗した理由も恐らくそこにあるのであろう。西欧の軍事技術と政治制度を研究していた栗津にすれば、先進国の高度な文明を日本で実現するため、儒仏で覆われた日本人の「暗塞」の精神を開くために自ら進んでキリスト教の道へ入ったのではないだろうか。

IV. まとめ

栗津の人物像の原型と考えられる『新栄教会六十年史』に以下の記述がある。

「栗津は……元膳所の藩士であつたが維新前脱藩して浪士となり四方に周遊して大に為す所あらんと志して居た。偶横浜に遊び西洋の事情を探ぐるの必要を認めたものが同所在留の米国宣教師ヘボン、バラ等の諸師に就き英語を研究した此等の関係から彼はキリスト教に接触し其の教旨に感服し終に回心して洗礼を受くるに至つた。それは慶応四年四月で皇政復古の明治元年である。」

これを読むと、膳所藩に生まれ、維新を迎える前に脱藩、浪士となり、まるで坂本龍馬のように各地を説いて回り、たまたま立ち寄った横浜で宣教師に師事したかのような書き方である。だが、既に見たように事実は異なると言わざるを得ない。

元々は中津藩と何らかの関係を有し、膳所藩士であることが確認できるのは最も早くても 1867（慶応 3）年であるし、脱藩したのは既に大政奉還も薩長による武力討幕も終わった 1869（明治 2）年ごろであった。粟津姓を名乗るようになったのも脱藩後とみられる。

恐らくは、「偶横浜に遊び」も誤りであろう。安政初年からの砲術習得の延長線上に、洋学を学ぶために「必然的に」横浜という先進地にたどり着いたのではないかと思う。1862（文久 2）年には既にヘボン、ブラウンらに師事し、英語の力量は当時であってはかなりのものであったはずだ。

まずは、本稿によって、以上のように粟津の人物像の修正・拡充を図れた。

次には、粟津受洗の動機について推測を試みた。

『新栄教会六十年史』は「キリスト教に接触し其の教旨に感服し終に回心して洗礼に至つた」としているが、通り一遍の捉え方でしかないであろう。粟津自身の個人的な理由ではなく、彼がキリスト教に期待したものは、日本人の「暗塞」を破ることであった。

これは、1866（慶応 2）年に長崎で受洗した村田政矩・綾部幸熙兄弟と通ずるものがある。彼らは授洗したフルベッキに「日本国民の無知と道徳的墮落に対して……深い悲しみを言（ママ）い表し……福音を十分に受け容れることによって、日本と世界に來たらし（ママ）べき靈的、道徳的、物質的な広大な利益について、大いに弁じてい」た、という³⁵⁾。

また、村田は、ロシアのピョートル大帝を崇拝しており、日本に欧米のような強大な海軍を創設するために高度な精神性が必要と考えていた³⁶⁾。若年から西洋砲術を学び、自ら最新版の英国兵書を翻訳し、海軍に招かれるようになる粟津の中にも、村田と同じような考えがあったと推測しても大きな誤りはないのではなかろうか。

注

- 1) 以下、次段落までの記述は、次に挙げた栗津高明に関する主な文献によった。①山本秀煌編『日本基督新栄教会六十年史』（藤原鉤次郎、1933年）、p.5・p.41②佐波亘編『植村正久と其の時代』2（教文館、1927年）、pp.222-238「五 栗津高明」③井上平三郎『浜のともしび：横浜海岸教会初期史考』（地方の宣教叢書5）（キリスト新聞社、1983年）、pp.149-151④布施田哲也「新島七五三太の書状の取次ぎ依頼をする J. M. Ferris の手紙（1867年4月16日 New York）」『新島研究』106（2015年）、pp.69-83⑤本井康博『新島襄と明治のキリスト者たち：横浜・築地・熊本・札幌バンドとの交流』（教文館、2016年）、pp.200-223「第8章 栗津高明」。
- 2) 後述のように「銚次郎」が正しいと考えられるが、文献によって「桂二郎」「敬次郎」「椿次郎」「銚二郎」など様々に書かれてきた。
- 3) 『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）p.73。
- 4) 『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局、1986年）pp.97-98。
- 5) 『朝日日本歴史人物事典』（朝日新聞社、1994年）93頁、『日本人名大辞典』（講談社、2001年）pp.95-96 など。
- 6) 『福音新報』640号・1907年10月3日付 p.4。
- 7) 北沢本「及門録」（京都大学附属図書館所蔵、維新特別資料文庫）。同大学図書館機構ホームページの「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」で閲覧。
- 8) 現在、閲覧できる中津藩家中の名簿類としては、半田隆夫解説・校訂『中津藩：歴史と風土』9（中津市立小幡記念図書館、1989年）収載の「席順（奥平中津藩分限帳）」「江戸家中分限帳 享和三癸亥年」や、今永正樹編『豊前中津旧藩士銘々帖』（ふるさと豊前中津の会、1987年）があるが、「安食」姓の者は見出せない。
- 9) 坂本保富「最新訂正版『象山門人帳史料』の提示：象山門人帳史料『及門録』の比較研究5」『平成法政研究』19(2)（2015年）、p.93。
- 10) 国立歴史民俗博物館がホームページで公開しているデータベース「地域蘭学者門人帳人名」でも、「安食銚（ママ）次郎」を「中津島津君門人」として扱っている。
- 11) 以下、平山洋『福沢諭吉：文明の政治には六つの要訣あり』（ミネルヴァ書房、2008年）pp.89-91、松本健一『評伝佐久間象山』上（中央公論新社、2000年）pp.236-241に基づく。
- 12) 山家克巳『八條半坡伝』（山家昌久・史郎、私家版、1985年）収載の「在府日記」（pp.136-137）。
- 13) 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』9（上）（同朋舎出版、1994年）、p.6。原

注は削除した（以下同じ）。

- 14) 前掲布施田論文、pp.73-74。
- 15) 膳所藩家中を網羅的に収載するほぼ唯一の資料とみられるのが、竹内将人編『膳所藩名簿（膳所城シリーズ附録）』（立葵会、1974年）であるが、「安食」に関する手掛かりはない。
- 16) 前掲『新栄教会六十年史』p.41、前掲『日本プロテスタント史研究』p.83、前掲『浜のともしび』p.149。
- 17) 1868年4月24日付、横浜発 フェリス宛てバラ書簡。「ジェイムズ・バラの手紙16」『あゆみ』42（フェリス女学院、1998年）参照。
- 18) 「（原議欠）（栗津高明より塾則、履歴書届出、他）」（簿冊「開学願書・戸籍掛ヨリ請継書類〈学務課〉壬申9月」、東京都公文書館所蔵）。
- 19) 栗津鉦次郎訳、平元秀次郎校『英国尾栓銃練兵新式』（平元氏稽古場、1869年、8冊、和装）。
- 20) 以下は、浅川道夫「維新建軍期における『兵式』問題」『軍事史学』42(1)（2006年）、p.7および平間洋一、イアン・ガウ、波多野澄雄編『日英交流史：1600-2000 第3（軍事）』（東京大学出版会、2000年）、p.28による。
- 21) 前掲『新島襄全集』9（上）、p.14。
- 22) 岐阜県教育委員会編『岐阜県教育史 史料編近世』（同委員会、1998年）、p.602。
- 23) 前掲『新島襄全集』9（上）、p.42。
- 24) 同前 p.48。
- 25) 1872年の新島襄宛てバラ書簡に“Bro. Ajiki”、1874年の同書簡に“your old friend Ajiki”という記述がみられる（同志社新島遺品庫所蔵、史料番号・下2318及び下2330。この書簡の存在は京都大学大学院教育学研究科の田中智子准教授の御教示によって知った）。バラにとっては「栗津」改姓後も「安食」の方が慣れ親しんだ名前であったことがうかがえる。
- 26) 「栗津利器弟 栗津高明」（「府限願何留・民籍編入願部 第8・第2套〈戸籍課〉〔戸籍課簿書類纂・第2套願何届類・府限諸願何留・民籍編入願部〕」、東京都公文書館所蔵）。
- 27) 平田好『懐郷坐談 全』（平田好、1908年）p.74の「江戸南八丁堀本多主膳正上屋敷ノ図」。東端「椎ノ木馬バ」近くに「アハ津」とある。
- 28) 「六等出仕故栗津高明祭染料ノ件」（「公文録」明治13年・第35巻、国立公文書館所蔵）。
- 29) 以上は、朝倉治彦編『明治官制辞典』（東京堂出版、1969年）による。
- 30) 土木司に関しても横浜在住であったことと関連している可能性が見出せる。鉄道

大臣官房文書課編『日本鉄道史』上（鉄道省、1921年）、p.47と東京府品川町編『品川町史』下（品川町、1932年）、p.340によると、1870（明治3）年3月、新橋―横浜間の鉄道建設のためにお雇い外国人の英国人技師が二手に分かれて両地から測量を行うことになり、その補助として日本人もこれに加わっており、想像を膨らませれば栗津もこれに関係していた可能性も考え得る。

- 31) 「海軍往復 7月 栗津大令史操練所出仕申付」（「公文類纂」明治3年・巻3、防衛省防衛研究所蔵）。
- 32) 注18）。
- 33) 横浜のどこに住んでいたのかは、新島民治の備忘録とみられる素行齋主人「掌中雜記」（前掲新島遺品庫所蔵、目録番号1709）にある、「一栗津銈次郎殿住所本町通り左り側可登二十四番ノ向ふアメリカ寺裏土蔵造り之内ニ住居／同人東京出府芝口山内謙晃寮と申所ニ罷在候由」との記述が手掛かりになる。横浜居留地本町通りの、海の側から見て外国人居留地と日本人居住地を分ける日本大通りの左側（南側）で、本町通りと日本大通りが交差する「可登（角・かど）」にある居留地24番の向こうのキリスト教会（アメリカ寺）内の裏土蔵造り、などと解説できそうだ。

現在の横浜海岸教会は当時、居留地167番であったが、そこには1868年ごろバラによって小会堂が建てられたとされている（川島二郎『ジョナサン・ゴープル研究』、新教出版社、1988年、pp.134-137の「ゴープル対バラの米国領事裁判」）。のち167番は「American church」と呼ばれており（立協和夫監修『Japan Directory 幕末明治在日外国人・機関名鑑』1、ゆまに書房、1996年、p.32の*THE JAPAN GAZETTE HONG LIST AND DIRECTORY FOR 1875*）。注17でバラが栗津と生活を共にしているとも考えて合わせると、栗津が住んでいた「アメリカ寺裏土蔵造り」はこの167番にあったのではないかと推測しうる。ただ、居留地の地番入り地図を見ると、167番は24番の「向ふ」という表現が適切な位置関係ではなく、民治のメモに誤りがある可能性もある。

- 34) 前掲『新島襄全集』9（上）、p.48。なお、この書簡は『新島研究』10（1956年）で資料紹介として取り上げられているが、内容に関する考察はなされていない。
- 35) 高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』（新教出版社、1978年）、p.102。中島一仁「幕末期プロテスタント受洗者の研究：佐賀藩士・綾部幸熙の事例にみる」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』8（2014年）も参照のこと。
- 36) 吉田清太郎『活ける宗教と人生』（雄山閣、1934年）、pp.46-49。中島一仁「幕末期プロテスタント受洗者の研究（3）：史料に探る村田政矩」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』10（2016年）も参照のこと。